

ニュース

Vol. 6

2007 March



国史跡

いとじょうあと

怡土城跡



城とは

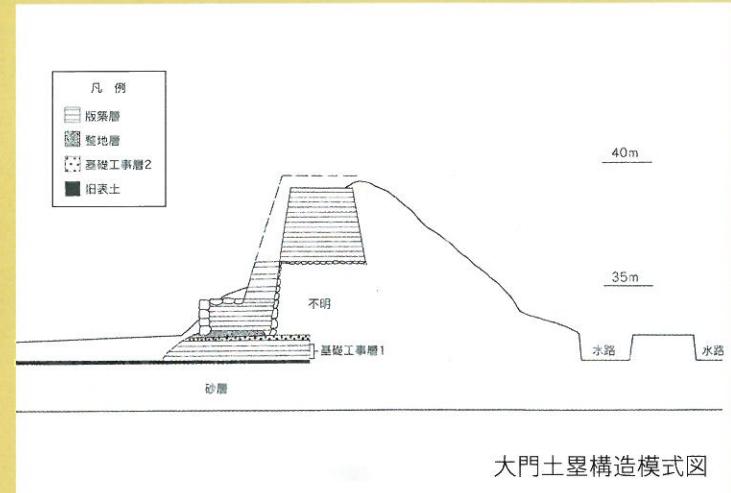
は前原市大字高来寺・大門・高祖に所在する、中頃に高祖山(標高416m)の西斜面に築かれ城です。

日本と新羅間の国際関係が悪化して新羅征高まる中で、大宰府防衛の西の拠点としてものといわれます。東は山頂の稜線、北は谷、西は山裾を境としており、全周6.5km、約290haに及びます。

も北辺に5箇所、南辺に2箇所の望楼跡・礎、西に2箇所の城門の礎石が残っています。長約2kmに及ぶ土墨は残存状況に恵まれ、往成の構造が良くわかります。



大門土壘



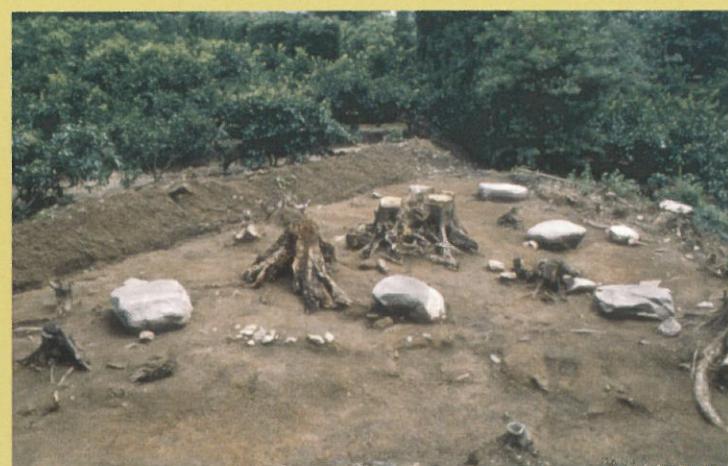
大門土壘構造模式図

高祖山西麓の平野部には高さ7~8mの土壘が全長約2kmに亘り残っています。上部は削平されていますが本来の高さは約10mと推定されます。幅10~15mの濠が設けられ、外敵侵入阻止のための機能をより強固なものにしています。また土壘内側には広く空き地が設けられていますが怡土郡の人民が避難できるよう確保された空間であったのか知れません。

は河川近くで地盤が弱かったため、まず土壘の基盤部分は石墨で基礎工事をを行い、その後に砂・粘土など質の異なる土を丁寧に交互に突き固(版築工法)。土壘の中で特殊な構造をしたもので、当時の技術力の高さがうかがえます。

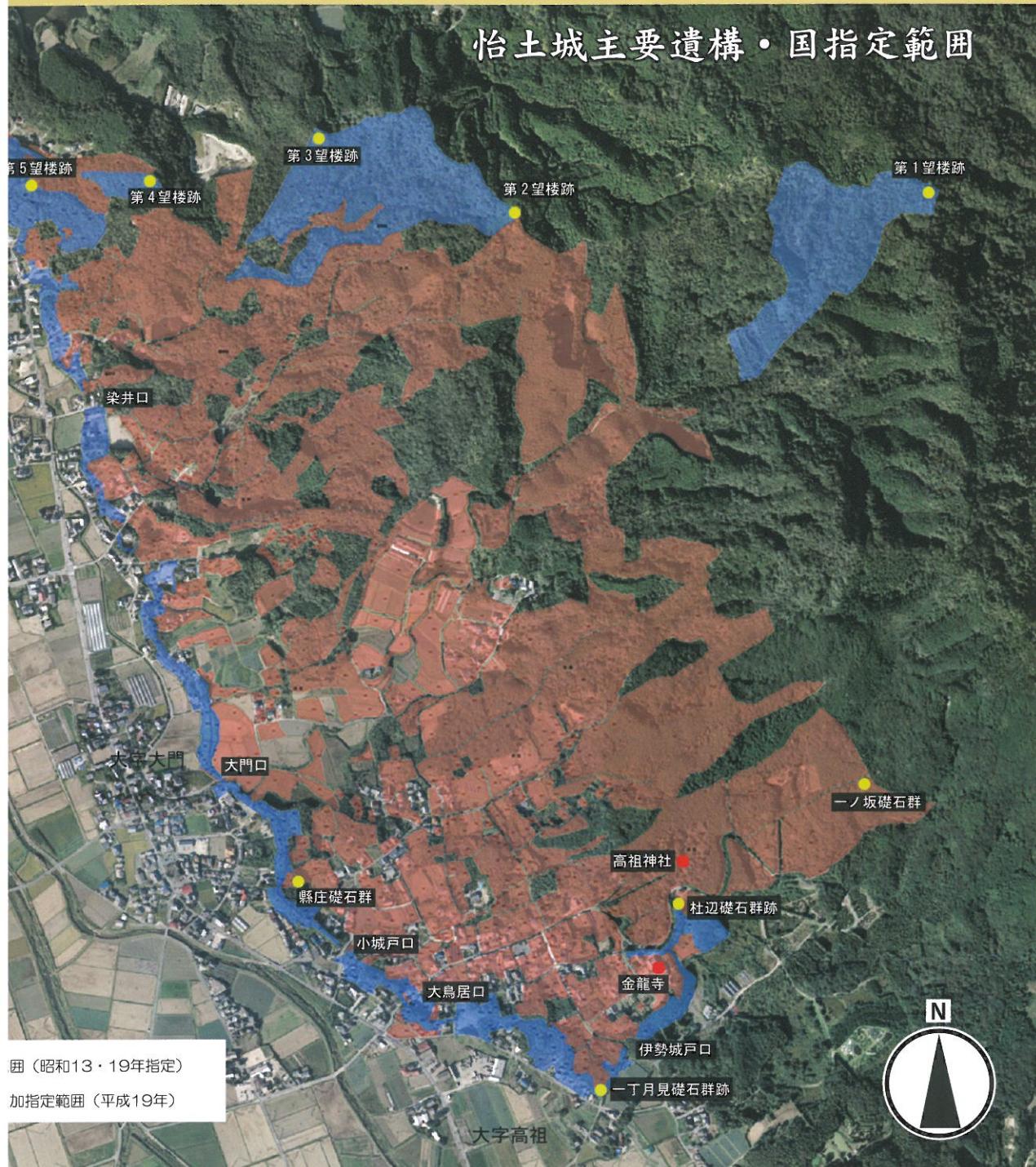


大門門口



樹木の跡

怡土城主要遺構・国指定範囲



上城の主な調査成果と経過

年	九州帝国大学（現在の九州大学）による調査で一ノ坂礎石群を含む望楼跡5箇所、城門2箇所、水門跡数箇所を確認	昭和57・58年	高来寺189番地調査で幅12mの外濠検出
年	土壙の一部及び礎石群を国史跡に指定	平成9年	高来寺60-1番地調査で幅15mの外濠検出
年	一部国史跡追加指定	平成10年	大門484-1番地調査で土壙版築構造確認
年～	福岡県および前原町教育委員会が調査開始	平成14年～	大門334番地調査で幅12mの外濠検出 大門29・30番地調査で版築・石垣等城外側土壙構造確認

宰府防衛最前線—怡土城築城

怡土城の築城について『続日本紀』には、天平勝宝8(756)年6月から神護景雲2(768)月までの歳月を費やしたことが記されています。緊張した東アジア情勢下で、時の権者・藤原仲麻呂(恵美押勝)による対新羅強硬政策が進められるなかで大宰府防衛の拠点として計画されましたが、工事は難航し、当時禁止されていた防人を動員して築城に当たらせました。

古代は官道にあたる海岸沿いの道と、日向峠を越えて現在の福岡市へ抜ける道があり、怡土城はその二つの道の中間に構えられています。平野部には「怡土郡衙」が、海浜部は「主船司」があり政治的にも交通の面でも要衝で、大宰府まで1日で到達できる要地もありました。博多湾から壱岐・対馬まで展望でき、怡土城はまさに西の要であり、からの外敵の侵入を阻む存在として大きな役割を担うことになったのです。

城の指揮者—吉備真備・佐伯今毛人

怡土城築城開始時、「専当官」として指揮を執ったのが吉備真備です。真備は21歳で入唐留学生として靈亀2(716)僧玄昉らと唐に渡り、儒学・律令・礼学・軍事などを学び、天平6(734)年に帰国した後は橘諸兄に重用されました。しかし政治介入が藤原氏の反発を招くなどして一時筑び肥前に左遷されました。天平勝宝3(751)年に遣唐副使として二度目の入唐を果たし、帰国後は大宰大式に昇進。主に軍事面で才能を發揮、緊迫する世情のなかで怡土城を指揮し、防備充実に尽力しました。天平宝字7(763)には造東大寺長官として帰京、その後中納言・大納言・臣へと昇進しました。

平神護元(765)年から神護景雲2(768)年の完成まで佐伯今毛人が「専知官」として引継ぎました。彼は造大業に携わる中で聖武天皇に認められ、怡土城のほか西の造営も手がけ、造営能力を高く評価されて造東大寺や造長岡京使などを歴任した人物です。怡土城のようないくつかの城跡・指揮をした人物が明確であることは珍しく、貴重な歴史的事実を今に伝えています。



吉備真備像

『怡土城跡』前原市文化財調査報告書第94集2006より転載

の後の怡土城—原田氏と高祖城

怡土城は一度も実戦を迎えることはありませんでした。廃城の時期は定かではありませんが、後世その一部を利用して高祖城が築かれました。一説には建長元(1429)年に